

利根川変流

「広瀬川低地帯」を流れていた古利根川がいつから現在の流れになったのか、確かなことは分かっていません。諸資料から1427(応永34)年に大規模な洪水があったことが明らかになっており、この大洪水によるものとの説があります。1477(文明9)年に長尾景春(ながおかげはる)が主家である上杉顕定(うえずぎあきさだ)らに対して反乱を起こし、顕定らがこもる五十子陣(いかっこのじん、埼玉県本庄市)を崩壊させました。『太田道灌状』(おおたどうかんじょう)によると、このとき顕定一行は、「利根川を越えて阿内(前橋市亀里町の宿阿内城か)にお移りになった」といいます。1477年には本庄市と前橋市の間に利根川が流れていたことになり、応永年間説を補強する根拠となっています。



太田道灌肖像画(大慈寺所蔵) 道灌の活躍により、長尾景春の乱は鎮圧された

厩橋城

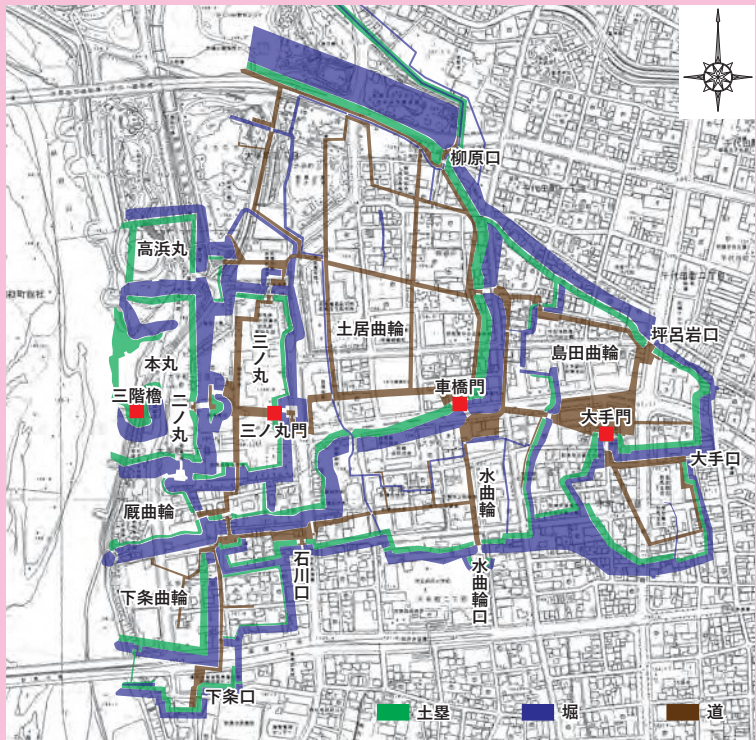
厩橋(まやはし・まやばし)城は、15世紀末頃、長野氏により築かれ、戦国期には有力大名の勢力争いに巻き込まれました。上杉謙信の関東進出により、厩橋長野氏は滅亡し、厩橋城には北条高広(きたじょうたかひろ)が配されますが、謙信没後、高広は小田原北条(ほうじょう)氏、ついで武田氏に寝返ります。1582(天正10)年に武田氏が滅亡すると、織田信長の武将滝川一益(たきがわかずます)が入城したものの、本能寺の変で信長が倒れると、小田原北条氏の属城となります。1590(天正18)年の北条氏滅亡後、徳川家康が関東に封じられ、家康側近の平岩親吉(ちかよし)が配されました。県庁の発掘調査では、長野氏時代の年号が墨書された五輪塔や北条高広時代の手づくねのかわかけが見つかりました。ろくろ成形ではないかわかけは、県内では一益が入城した箕輪城と厩橋城でしか出土していません。



滝川一益肖像(国立国会図書館) 長昌寺にて能を興行したという

前橋城

1601(慶長6)年、平岩親吉が甲斐に移り、譜代筆頭の酒井重忠(さかいしげただ)が川越から転封となりました。真偽は定かではありませんが、家康は「汝に関東の華をとらす」と言って前橋城を与えたという伝承があります。その後、姫路に移るまでの約150年の間に、前橋藩は石高15万石を超え、酒井氏は要職を歴任する幕府の中核となり、厩橋城は前橋城と改名されています。1749(寛延2)年、酒井氏に替わり松平朝矩(まつだいらともり)が姫路から入城した時には、利根川の浸食による前橋城の崩落は本丸にまでおよび、御殿を三の丸へ移しますが崩落は止まず、ついに1767(明和4)年、在城わずか18年で川越に移ることになりました。城主不在の前橋城は破却され廃城となり、前橋は川越藩の分領として陣屋支配となりました。廃城から約百年後の1867(慶応3)年、城主帰城を願う前橋町人によって前橋城は復興されました。この背景には、横浜開港による生糸貿易で得た莫大な経済力がありました。再築前橋城は、一説によると砲台を備える最新の近代城郭だったといえます。この年に川越から松平直克(まつだいらなおかつ)の代理として、「前君(まえぎみ)様」と呼ばれた典興(つねのり)、先々代藩主を迎え入れ前橋藩が再興しますが、翌年には明治維新を迎えます。



酒井氏時代の前橋城復元図(都市計画図と現存する最古の前橋城絵図の重ね図)

車橋門

車橋門(くるまばしもん)跡は、前橋城の遺構として、再築前橋城本丸の土塁を除くと唯一現存する前橋市の指定史跡です。4代藩主の酒井忠清(さかいただきよ)の代に、2本の柱の上に横木を1本置いた冠木門(かぶきもん)から、櫓の2階を通って門の左右に渡れる渡櫓門(わたりやぐらもん)に改築されました。酒井家により整備された前橋城は、最も華やかな姿を見せました。



現存する最古の前橋城絵図における車橋門/石垣で囲まれた車橋門の基礎

酒井忠清

忠清は4代将軍家綱(いえつな)の治世に大老職を務めました。忠清の上屋敷は江戸城大手門下馬札付近にありました。下馬札は、将軍以外はそこから奥へは馬から下りて徒歩で渡らなければならない将軍の権威を意識させる場所です。忠清はその権勢から「下馬将軍」と呼ばれました。現在は、紅雲町の龍海院に眠っています。



伝酒井忠清座像(群馬県立歴史博物館提供)

まえばし地下マップ 中央地区

〒371-0853 前橋市総社町三丁目11-4
前橋市教育委員会事務局 文化財保護課
Tel.027-280-6511 令和3年3月発行



治水地形分類図(国土地理院)

前橋台地と広瀬川低地帯

中央地区の地形は、「前橋台地」と「広瀬川低地帯」の2つに区分されます。「前橋台地」は、約2万4千年前の浅間山の山体崩壊が原因となって発生した前橋泥流が堆積することにより、形成されました。「広瀬川低地帯」は、前橋市関根町付近から伊勢崎市にかけての細長い沖積(ちゅうせき)低地であり、かつてこの低地の中を利根川が流れていました。前橋台地と広瀬川低地帯との境界には崖が発達しており、高低差を意識させられます。前橋台地は調査例が少ないため、縄文・弥生時代の遺跡がほとんど見つかっていません。また、利根川流路であった広瀬川低地帯でも調査例が少なく、これからの調査に期待されます。

市街地の古墳

昭和10年に群馬県下の古墳の悉皆(しっかい)調査が行われました。この調査内容をまとめたものが、「上毛古墳総覧」(じょうもうこふんそうらん)です。中央地区では15基の古墳が報告されています。このうち「前橋11号墳」は、前橋城天守台が古墳の墳丘であったとの伝承に基づくものようです。前橋市街地では天川二子山古墳や不二山(ふじやま)古墳が著名ですが、近年の調査により、これら以外にも古墳の存在が知られるようになりました。前橋城の調査において埴輪類が出土し、知事公舎跡地の東(前橋城北曲輪1号墳)や六供温水プール周辺道路(六供中京安寺遺跡)からも古墳が確認され、平成の調査報告「群馬県古墳総覧」に追加されました。



天川二子山古墳



不二山古墳

条里制水田

奈良・平安時代において、一辺の長さが1町(約109m)の正方形を基本単位とする土地区画制度がありました。1町四方の区画を「坪(つぼ)」といい、「坪」を縦横に6個ずつ並べた6町(約654m)四方の区画を「里」といいます。この「里」の東西方向を「条(じょう)」、南北方向を「里(り)」といったことから、「条里制(じょうりせい)」と呼ばれています。この条里制に基づいて水田開発は行われました。文京町No.1遺跡などの発掘調査で確認された水田畦畔の中には、「坪」の境界に位置すると想定される大畦畔が見つかっています。

西方文化を持つ人々

浅間山が大噴火した3世紀後半頃、S字甕という、東海地方にルーツを持つ口縁部がS字状の土器を使用する人びとにより、前橋台地の開発が進められました。高燥な台地において水田経営を行うため水路の掘削が進められるとともに、4世紀には県内でも最古とされる大型前方後方墳の前橋八幡山古墳や大型前方後円墳の前橋天神山古墳が相次いで築造されました。



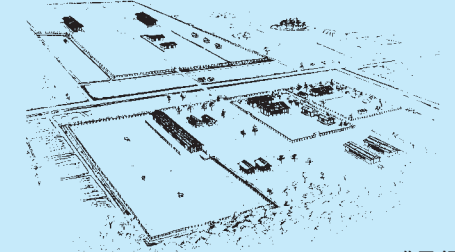
六供東京安寺(ろくくひがしきょうあんじ)遺跡出土土甕

女溝

前橋台地での水田開発を進めるうえで、台地上の水源では不足し、古利根川の水を前橋台地に揚水する必要がありました。国道50号南の松竹院付近から古利根川の水を前橋台地に引水するため掘削されたのが、2つの女溝(おんなぼり)です。調査の結果、西の1号女溝が古墳時代、東の2号女溝が中世のものと考えられます。六供下堂木II(ろくくしもどうぎ2)遺跡では、平安時代の水田下からさらに古墳時代の水田も見つかっています。水路の開削が前橋台地を肥沃な生産地帯へと変えたのでしょう。

群馬駅家

前橋台地には、国府と群馬駅家(くるまのうまや)が設置されたと推定されています。国府は、奈良・平安時代に置かれた地方統治のための役所で、上野国府は元総社町にあったと言われていいます。駅家は、都と地方を結ぶ官道に置かれ、公の旅行者に馬や宿を提供するための施設でした。上野国を通る官道は、東山道(とうさんどう)駅路と呼ばれていました。前橋の古名「厩橋(うまやばし)」は、駅家があった場所にかかる橋を「駅家橋」と呼んでいたものが「厩橋」と表記されたと考えられており、このことから群馬駅家は県庁近辺にあったとされています。



作図 飯塚聡

【参考】新田駅の推定図(『新田町誌』第1巻 太田市教育委員会提供)

年	元号	出来事
一八七六年	明治九	第二次群馬県が成立する。前橋城本丸御殿は群馬県庁舎として使われる。
一八七一年	明治四	廃藩置県により第一次群馬県が成立する。県庁を高崎に置く。
一八六七年	慶応三	前橋城が完成する。大政奉還。
一八六三年	文久三	前橋町有志から一万両近い献金。前橋城再築が正式に許可される。
一八六二年	文久二	藩主直克が前橋城再築内願書を幕府に3度提出する。
一八五九年	安政六	前橋町有志から一万両近い献金。前橋城再築が正式に許可される。
一八四三年	天保十四	郡奉行安井与左衛門が利根川の改修に成功する。
一八二八年	文政十一	松平齊典(なりつね)が姫路への転封を願う。前橋町有志が帰城嘆願書を提出する。
一七四九年	寛延二	藩主酒井忠恭(ただすみ)が姫路に転封となり、代わって姫路の松平朝矩が入封する。
一七四八年	寛延元	殿移築の地鎮祭を行う。
一七四三年	寛保二	利根川大洪水。
一六九九年	元禄十二	暴風雨で領内に大被害。前橋城外曲輪の角櫓の取り壊しを申し出る。
一六八一年	天和元	酒井忠清が隠居し忠明(ただあきら)、のち忠孝(ただたか)が藩主となる。
一六六六年	寛文六	酒井忠清が大老となる。
一六五三年	承応二	酒井忠清が老中となる。前橋城本丸、石垣などの修復を許可される。
一六〇一年	慶長六	平岩親吉が甲斐に移り、代わって川越から酒井重忠が厩橋城に入る。
一六三七年	寛永十四	酒井忠清が藩主となる。この頃、「厩橋」を「前橋」と呼ぶようになる。
一五九〇年	天正十八	豊臣秀吉の小田原攻めの折、北条方として厩橋城と石倉城が守城として使用される。徳川家康が関東入りし、譜代の平岩親吉を厩橋城に入封させる。

年	元号	出来事
一五八二年	天正十	滝川一益が厩橋城に入城するが、本能寺の変で織田信長が倒れ、帰国する。この後、厩橋城は北条氏の属城となる。
一五七八年	天正六	上杉謙信が死去。その後、後継者争い、御館の乱(ら)が起こり、北条氏による上野支配が進む。
一五七二年	元亀三	上杉謙信が石倉城を攻撃し破却する。※武田信玄が厩橋城の対岸の石倉に築き、厩橋城の押さえとしていた。
一五六二年	永禄五	北条氏康が武田信玄の上野侵攻に同調し、厩橋城を攻撃する。「殊に厩橋焼き候」(氏康書状)
一五六〇年	永禄三	長尾景虎が北条氏康討伐のため、上杉憲政(のりまさ)を奉じて関東に攻め込む。厩橋城で年を越す。以降、天正十年まで北条高広・景広父子が在城する。
一五二七年	大永七	厩橋宮内大輔(くないのたいふ)、総社長尾顕景(あきかげ)を攻撃する。
一四七七年	文明九	長尾景春に五十子陣を急襲された上杉顕定ら、利根川を越え、阿内へ逃走する(太田道灌状)
一四二七年	応永三四	利根川が変流する。(『上野名跡誌』) ※時期について複数の説あり
一〇〇八年	天仁元	浅間山が噴火する。(浅間B軽石が降下)
七九四年	延暦二三	平安京遷都。
七三三年	和銅六	上毛野国を上野国と改める。この頃、国府が成立する。
七一〇年	和銅三	平城京遷都。
七〇一年	大宝元	大宝律令が制定され、国・郡・里制が施行される。
六四五年	大化元	大化の改新が始まる。各国に国司・郡司が置かれる。
六世紀		榛名山二ツ岳が2度噴火する。
四世紀		県内最古とされる前方後方墳の前橋八幡山古墳や前方後円墳の前橋天神山古墳が相次いで造られる。
三世紀後半		浅間山が噴火する。(浅間C軽石が降下)
約二万四千年前		前橋台地が安定化したと想定される。